

TEIKOKU DATABANK HISTORICAL MUSEUM

MUSE | 2023.9 Vol.43

帝国データバンク史料館だより【ミューズ】



■巻頭特集

新収資料紹介

『帝国信用録』第1版

■輝業家交差点 近代にっぽんを彩る人物往来

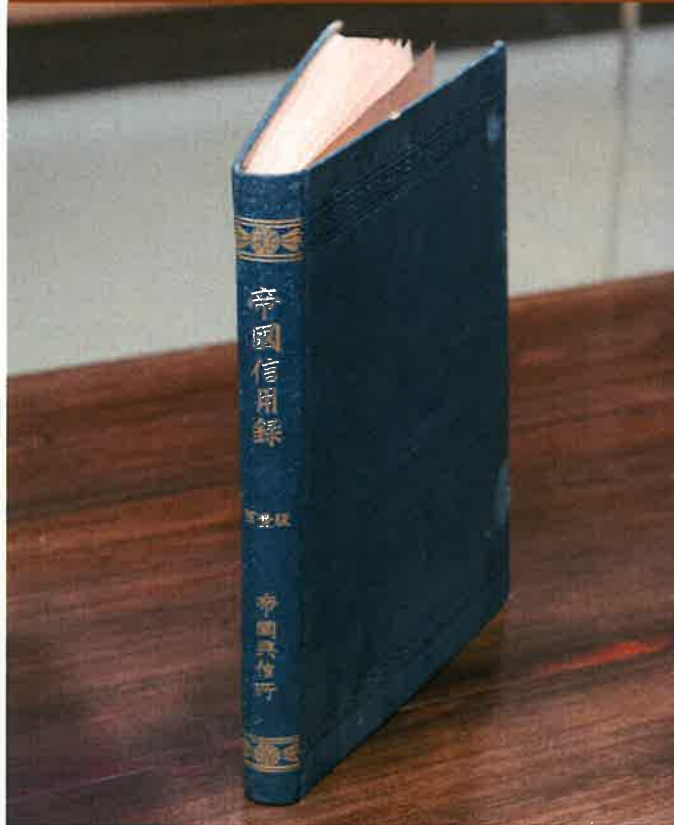
村上 巧児

ジャーナリズム精神と番頭魂で創刊した『九軌社報』

■資料にみる企業の歴史

江戸時代の信用取引—ツケ払いと為替手形—

新収資料紹介 『帝国信用録』第1版



戦前、情報の主な提供手段が紙であった時代に、商工業者が新規取引先の開拓の際に参考にしたのは、各興信所が発行する信用録でした。信用録は、商工業者の正味身代（資本価値）と信用程度をリスト化し、記号で表した冊子です。取引先の信用情報を一覧できる同書は、多数の取引を行う商工業者から必携の書として重宝されました。

帝国興信所でも、1908（明治41）年から1943（昭和18）年までの間、全国の商工業者を収録した『帝国信用録』を毎年刊行していました。^{※1}全国の商工業者の信用情報を豊富に収録する同書は、戦前日本の経済活動の様相を知る貴重な資料です。

これまで、初期の『帝国信用録』には現存しない版も多く、長らく第1版は幻の存在でしたが、このたび新規に第1版を入手しました。^{※2}また、前後して学術書籍の出版を手がけるクロスカルチャー出版から、復刻版『明治大正期 帝国信用録』が刊行されました。^{※3}第1版の入手と復刻版の刊行開始を記念して、今回は『帝国信用録』第1版について紹介します。

興信所の目的は 確実なる信用録を作るにあり

『帝国信用録』は、『帝国銀行会社要録（現『帝国データバンク会社年鑑』、以下要録）』よりも5年早く創刊し、戦前は『要録』の売上を常に上回る帝国興信所の主力商品でした。当時、ダン社やブラッドストリート社（現D&B社）などのアメリカの信用調査会社では、信用録の発行を業務のメインとし、頻繁な更新により常に精度の高い情報を提供していました。会員は信用録の利用を目的として、信用調査会社に加盟していました。

帝国興信所でも、「興信所の目的は確実なる信用録を作るにあり」^{※4}として、アメリカの信用録の正確さや信頼性に倣い、より完成度の高い信用録を作成し、会員が日常的に『帝国信用録』を参照・活用することで、商取引の活発化を目指しました。

第1版の収録内容

今回入手した第1版には、1906（明治39）年4月から1908年2月までの調査報告書に基づいた、およそ6,500人の商工業者の信用情報が収録されています。刊行時、本社以外の事業所

は5ヶ所（横浜、大阪、福岡、門司、長崎）、大部分が東京府下の商工業者（およそ5,000人）でした。翌年に発刊された第2版では、甲府支所の開設と全体のボリュームアップにより、1万6,500人と1年で大幅に収録人数を増やしています。また、銀行と保険会社の選択は医薬の選択のように緊切なものであるとして、別途、東京府の銀行209行と全国の保険会社42社を掲載しています。

『帝国信用録』解読の仕組み

収録項目は、各商工業者につき「姓名」、「職業」、「屋号」、「店舗又ハ住所」、「開業年号」、「対物信用（正味身代）」、「対人信用」、「年商内高又ハ収入（売上高）」、「盛衰」、「取調年月」が設けられ、「対人信用」は取引先その他一般より認められた商業道徳心の程度、「盛衰」は営業状態その他現状の盛衰を表しています。このうち、「対物信用」、「対人信用」、「年商内高又ハ収入」、「盛衰」の4項目はひらがなやカタカナの符号で表記され、別紙の「符号手引」に記された符号と照合して、その程度を判断しました。これは、信用情報を守るための工夫で、「符号手引」がなければ解読できない仕組みになっていました。

また、提供手段は販売ではなく会員のみを対象とした貸与の形式をとり、退会の際には返却することになっていました。対物信用がよくても対人信用が低い場合や、その逆もあり、利用者は符号を読み解いて取引に必要な情報を得ていました。

『帝国信用録』第1版 東京府下「い」の項

渋沢栄一の信用程度

渋沢栄一を例に、「符号手引」を使って『帝国信用録』を読み解いてみます。第1版では、職業は会社員、符号は「んあん力」と表記されています。対物信用(正味身代)と収入は未詳(ん)ですが、対人信用は厚く(ア)、盛衰は盛ん(力)であり、どちらも最高の評価です。翌年の第2版では、再度調査が行われ、職業は会社役員、符号は「にあん力」に更新されています。再調査により正味身代が判明し、「に」=200万円以上300万円以下となっています。



渋沢栄一(国立国会図書館「近代日本人の肖像」)

商人ではないため売上高は未詳のままですが、渋沢栄一という人物の信用程度の高さを読み取ることができます。

符号手引

符号 金額(対物信用(正味身代)又八年商内高、年収入額)

い 一千万円以上
ろ 五百万円以上一千万円迄
は 二百万円以上五百万円迄
に 二百万円以上三百万円迄
ほ 百五十万円以上二百万円迄(中略)
つ 一万円以上二万円迄
ね 五千円以上一万円迄
な 三千円以上五千円迄
の 一千円以上三千円迄
む 一千円以下
す 僅少
う 無
の 負債
ん 未詳

『帝国信用録』第1版 符号手引

符号 対人信用程度

ア 厚
イ 稍厚
ウ 普通
エ 稍薄
オ 薄

符号 盛衰

カ 盛
キ 稍盛
ク 常態
ケ 稍衰
コ 衰

【渋沢栄一 第1版と第2版の信用程度】

姓名	職業	屋号	店舖又ハ住所	開業年号	信用 対物	対人	年収入額	盛衰	取調年月
渋沢栄一	会社員	日、見、二	ん	ア	ん	力	11.2
第1版									
渋沢栄一	会社役員	北豊島、通、月、四、四、日、見、二	に	ア	ん	力	43.1
第2版									

「ん」を全廃せよ

1929(昭和4)年、創業者後藤武夫は社内報『脱俗』^{※5}において、信用録の正確性を期して、「ん」の全廃を呼びかけています。「ん」=未詳。興信所の調査に未詳があってはならない、「ん」を全廃せよ。信用調査に携わるものとして、肝要で切実な主張ですが、符号のおかげで幾分おかしみのある表現となっています。

※1 戦後、1959年に復刊しますが、わずかに2版のみで復刊。総誌対象を各工業者から会社に変更し、項目を増やしたことにより、「脱俗」との差別化が図れなくなったことが要因の一つと考えられています。
 ※2 ネットオークションにて購入。
 ※3 底本に当該の所蔵資料を使用。
 ※4 『脱俗』1928年10月25日号 巻頭言
 ※5 『脱俗』1929年2月25日号 巻頭言

【復刻版と解題】

『明治大正期 帝国信用録』(日本経済調査資料シリーズ8)

第Ⅲ期 第1回配本 明治42年/明治45年 全5巻

■ 体裁: B5版・上製 約3,200頁 ISBN978-4-910672-19-9

■ 出版社: クロスカルチャー出版 2023年6月

第1回配本は、第2版と第5版の2冊を上下、上中下に分け全5巻刊行。

年1回第4回まで配本。今回入手した第1版も収録予定。

阿部武司『戦前期商工信用録解題一詳細とその活用法一』

■ 体裁: B5版・並製 52頁 ISBN978-4-910672-25-0

■ 出版社: クロスカルチャー出版 2023年7月

商工信用録の沿革、特徴、活用方法を検討し、商工信用録類の学術的意義を明らかにした解題書。

帝国興信所の略歴、『帝国信用録』についても詳述されています。





ジャーナリズム精神と番頭魂で創刊した『九軌社報』

大手私鉄創業期の経営者が誰なのか、たとえば阪急の小林一三、東急の五島慶太といった名前は、思い浮かべやすい。これに対して、三大都市圏以外に本社を置く西日本鉄道(西鉄)の初代社長は、即答できるか。西鉄自体、戦時期の交通調整で5社が合併して発足した鉄道会社なので、なおさら創業者の顔を想像しがたい。今回はその答えとなる村上巧児に焦点をあて、本人の筆記録や伝記などから、大手私鉄の経営者にしては珍しく転業を重ねた職歴と、文筆好きの彼が発行した社内報の役割を見ていくことにしたい。

ジャーナリズムの出会いと新聞記者生活

村上巧児は1879(明治12)年8月24日、大分県中津町に住む旧藩医・村上田長の四男として出生した。曾祖父の村上玄水は、中津藩蘭医学の開祖と評される。父・田長は秋月藩典医の三男だったが、25歳で玄水の子・春海の養子となった。現在、中津市にある村上記念病院は、村上医家と巧児の功績を記念して戦後に開院されたものである。田長は医業のかたわら、1876年に地方新聞のさきがけとなる『田舎新聞』を中津で創刊した。これが、巧児とジャーナリズムとの出会いになる。巧児も「幼児から新聞なるものに、特に興味をもち、自然、文筆に親しむ習癖となった」(『村上巧児翁伝』、22頁)。

巧児の文筆への執着は、その職業を志す方向へと成長させる。1903年に早稲田大学の政治経済学科を卒業すると、志望どおり大阪毎日新聞社(大毎)へ入社した。当時の大毎では、社長に就任した本山彦一が東京進出計画を実現させ、大きく飛躍していた。当時、新聞各社には専用の長距離電話回線がまだ存在しなかったために、東京在勤の巧児は、大阪本社と一般公衆電話で直接連絡するという重要な仕事を担当していた。時には、巧児が電話交換嬢を手なづけ、その通話順を繰り上げてもらう「艶罪」を犯したとも自省している。しかし、新聞記者として大先輩だった大阪朝日新聞の内藤湖南に、その心

得を乞うた際、「人間四十才を越すと生理上兎角弥次馬気分が希薄となるのを免れぬ、その時は既に一流記者たるの資格を失つてゐる」(『還暦』、256頁)と言われたのが、胸に堪えた。巧児は1908年に30歳で大毎を退社するが、新聞事業そのものには大きな魅力を感じていた。

叩き上げられた三越百貨店での番頭生活

大毎退社後の巧児は、同郷中津の先輩・和田豊治の紹介で、同年に三越呉服店に就職した。「新たに就く職業は、将来文化の発達に伴い限りなく発達する確実性を有し且つ中年者が飛び込んでも相当立身出世の余地あるものでなければならぬ」(『還暦』、259頁)として流通業を選択したが、三越での4年間は巧児にとって、「実業社会の得難い試練、尊い体験の道場」(『村上巧児翁伝』、71頁)となった。ちょうど三越呉服店も、1904(明治37)年に経営改革で三井家の事業から分離独立し、百貨店業へと方向転換する時期にあった。

巧児は、「日本の百貨店は高の知れた番頭の世界」(『還暦』、259頁)と、自ら高を括っていたが、次第に番頭の優秀さに感服する。とくに、専務取締役・日比翁助との出会いは重要だった。日比は、通信販売部に最も力を注いでいた。巧児も、入社当時の広告部からこの部署に移った。番頭たちは、日本全国から毎日数百通届く注文のどんな要求にも応じていた。日比自身も、寸分の間もない応接ぶりや店内上下に徹底させる威望を見つけていた。こうした優秀な店員を抱える日比は、三越呉服店を「店員のもの」と称したが、巧児も内情を知るに伴って、その意味を実感していった。三越の在勤経験は、巧児の「物質卑下と高踏自尊の記者気質は徹底的に消磨され、兎も角実業人として立ち得るだけの兩期的な変化を受けた」(『還暦』、266頁)として、後年井筒屋の経営に活用される。

■ 九水入社と九軌不正手形事件

1911(明治44)年、日比が不治の病に倒れたのを契機に、功児は再度転職を試みる。そして翌年、再び和田の薦めで、創立直後の九州水力電気株式会社(九水)へ入社し、福岡市に赴任した。当時、九水と東邦電力との間で、激しい電灯合戦が繰り広げられていた。両社は、平和的解決をめざす合併案を練っていたが、1917(大正6)年には東邦が九水を訴える行動に出た。営業課長だった功児は、重役の麻生太吉や相談役の和田たちと法廷に立ち、九水側を勝訴へ導いた。さらに営業部長時代には、熊本県の杖立川水力電気株式会社設立に対し、功児は政友会熊本支部の松野鶴平と交渉に臨み、松野や地元からの理解を得ることに成功した。

このように、功児は2度の転職を行い、全く異なる3業界で働いてきたが、いずれも、その業界が全盛期の時に入社し、また全盛期を迎える業界へと転職している。また、長距離電話による情報伝達、見えない顧客への対応、ステークホルダーとの交渉というのは、日頃から弁舌が巧妙であった証左であろうし、その豊富な語彙力は文筆好きに由来していたとみて相違ない。このように、筆だけでなく、口も立ったのが、功児のセールスポイントだった。



旧九州電気軌道本社(提供:西日本鉄道株式会社)

功児は、1921年には九水の取締役、1923年には常務取締役に就任する。40歳代前半での重役就任は、きわめて早い。この頃、北九州地域の電力業界では、阪神財界の実業家を中心に設立された九州電気軌道(九軌)が電気軌道事業や電灯・電力の供給を実施し、事業領域を九水と交錯重複させていた。1928(昭和3)年、麻生太吉が九水社長に就任すると、九水は九軌を買収し、内部から九水勢力を浸透させる作戦に出た。翌年、小林一三の仲介で、九軌の大株主かつ専務取締役で、松方幸次郎九軌社長の娘婿だった松本委蔵は、自身の所有する九軌株35万株を九水側に売却したが、ここで1つ事件が発生する。松本が九軌の株価維持と資金調達を目的として、業績の粉飾を約10年間継続させたうえ、不正に手形を発行していた。その金額は、総計4,150万円にも及んだ。松本が、九水の麻生社長に事態を告白すると、功児は専務取締役として九軌へ乗り込み、7か月で不正手形の回収を完了させた。1930年、九軌の役員は、社長の大田黒重五郎をはじめ、九水側の人物で構成された。しかし、大田黒は東京在住だったため、実際には、九軌の専務取締役となった功児が福岡県内で経営再建の陣頭指揮を執った。

■ 労使強調をめざした『九軌社報』創刊

九軌経営の緊縮政策は、人員削減、減給、賞与削減、路線拡張の廃止、物品購入の節約、消耗品の節約、株主への無配に至った。しかし、ムチばかり振っても、社中が団結できるわけではない。そこで、いか

にもジャーナリスト出身の巧児らしい取り組みとして、新たに始まったのが、1931(昭和6)年7月から発行された社内向け月刊誌『九軌社報』である。

『九軌社報』第1号を見ると、冒頭で巧児自ら「発刊之辞」を述べている。「痛切ニ要望スルモノハ全職員ノ石ノ如キ堅キ団結ト火ノ如キ奮闘デアル」、「社報ヲ発刊スルハ実ニ職員各位ノ家族的団結ト智能啓発ノ資料ニ供センガタメデアル」とあるように、九軌が経営を回復させるべく、従業員の結束力強化と能力向上、労使間の協調の必要性が謳われている。巧児はこの点に、たとえ緊縮予算から費用を割いてまで社報を発行する意義を求めている。

社報は続いて、株主総会の模様や営業概況、社長訓示、辞令など、会社組織の現況を報告するなかで、「研究資料」という主に電気工学に関するノートを14頁中4〜5頁も掲載する。これが、上述の「智能啓発ノ資料」にあたる。とりわけ第1号では、功児が1929年8〜11月、国内主要電灯会社の代表団「ジャパン・ライト・ミッション」の一人として、エジソン電灯発明50周年祝賀会のために渡米した際、功児が聴講した諸講演の筆記集を掲げた。ただし、専務の心ここにあらぬ社員も、少なくなかったようである。時には編集後記で、「社報掲載事項は悉く諸君の米の飯ばかりだから、最終までよく目を通して諸君の腹の中に収めて頂き特に研究資料には一層力ある寄稿を望んで已まざる次第である」(『九軌社報』第11号)と、創刊から1年経っても労使相互の智能啓発を主張している。

社報の内容が堅くなる時もあれば、社員にわかりやすい野球の話題を提供することもある。学生時代から熱烈な野球ファンだった功児は、渡米中の「紐育で野球を見物したとき、スコアボードの一部に他市の大試合の成績をも知らずようにしてあったのは面白いと思つた、小倉球場で製鉄門鉄の試合を見物しながら東京神宮球場で行はるゝ其日の大学チームの試合成績を刻々知り得るのもファンには一段と興味深いことであらう」(『九軌社報』第11号)と、各地の途中経過の情報提供に関心を寄せ、読者である社員の関心をひいている。九軌は、早くも1924(大正13)年に、子会社を通じて小倉の到津にグラウンドを建設し、ここで都市対抗野球大会の予選を開催していた。また九軌社内でも野球部が作られ、九水との対抗戦が企画された。社報はこれらの試合結果を伝え、社員の活躍を讃えている。

こうした社内スポーツの報道は、アマチュアだけに限らない。功児自身は、1935(昭和10)年に九軌社長に就任、1942年の5社合併後の西鉄初代社長を経て、終戦後に退任する。戦時1年間だけプロ野球に参入した西鉄は戦後、西鉄ライオンズを所有・経営する。功児の編集意志を継いだ『西鉄社報』は、その成績や順位だけでなく、三原脩監督の手記や選手たちの横顔などを繰り返し紹介してきた。監督・選手も同じ西鉄の「社員」として扱うことで、1972年の球団譲渡まで、社員全体の一体感と勤労意欲の向上に繋げてきた。



『九軌社報』第1号(提供:山本魚穂コレクション)

江戸時代の信用取引 —ツケ払いと為替手形—

資料にみる
企業の歴史

帝国データバンクが主業とする信用調査業。

信用調査とは、企業と企業が取引する際に、取引相手のことを知るために行う調査のことをいいます。

信用調査^{※1}は、企業間の取引が信用取引であることを前提に行われます。

信用取引には、金融用語の一つとして投資家が証券会社から現金や株式を借り入れて売買する株式投資の意味もありますが、ここでは「給付と反対給付との間に時間的なずれのある債権・債務の関係。物品を購入してその代価を後日に支払う類。」(『広辞苑』)すなわち「後払い」のことをいいます。売掛や為替手形・小切手による手形取引などがこれに該当します。

信用取引の歴史は古く、日本においても江戸時代には三都で発達した両替商を中心に信用取引が行われていました。

今回は、江戸時代の信用取引がどのように行われていたのか、資料を元に見ていきます。

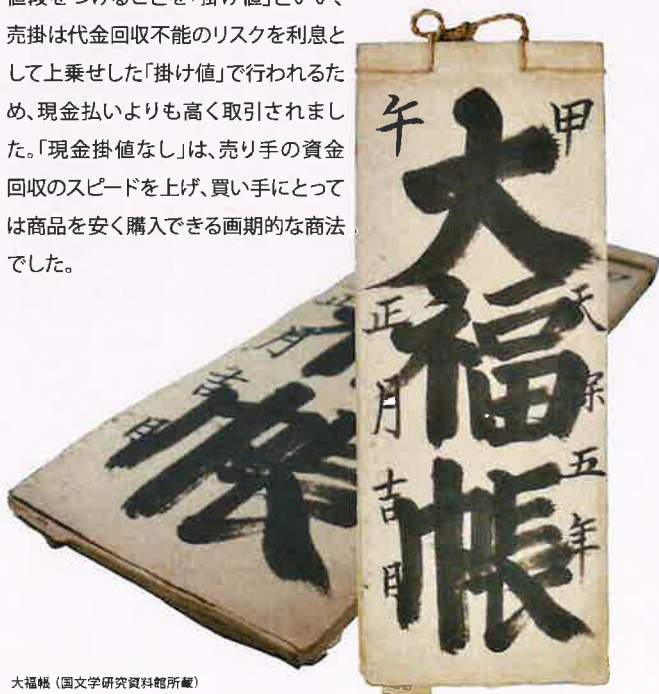
〔著〕入道松野(国立国会図書館)

④ ツケ払い

信用取引の一つ、「売掛」は掛け売りともいい、江戸時代後半には、食料品や生活用品を「付け」「掛け」で買う「節季払い」の慣行が民間に広く浸透していました。客側は、買い物の際に「通帳」をもって店に行き、買ったものの品名や金額、購入日を通帳に「付け」てもらい、節季(盆と年末)にまとめて支払いました。店側は、売った内容を「大福帳」に「掛け」売りとして記入し、節季にまとめてその代金を督促、回収しました。いわゆるツケ払いであり、現在のボーナス一括払いに近いシステムです。

節季払いは売り手と買い手にある程度の信用がなければ成り立たず、回収の見込みがない相手、行きずりの客などには現金払い、なじみの客には節季払いで回収していました。

三井越後屋の新商法「現金掛値なし」が画期的であったのは、すでに売掛が一般的に行われていたことを意味します。本来の販売価格より高い値段をつけることを「掛け値」といい、売掛は代金回収不能のリスクを利息として上乗せした「掛け値」で行われるため、現金払いよりも高く取引されました。「現金掛値なし」は、売り手の資金回収のスピードを上げ、買い手にとっては商品を安く購入できる画期的な商法でした。



大福帳(国文学研究資料館蔵)

④ 『世間胸算用』にみる年越しと振手形

節季払い、特に1年の総決算にあたる大晦日には、支払いの督促からあの手この手で逃げようとする町人の様子が風物詩となっています。

狂歌

「何もかもありたけ質に置き炬燵 かかろう鳥の蒲団だになし」
「貧乏のボウ(棒)も次第に長くなり 振り回されぬ年の暮れかな」
「貧乏はすれば悔しや瀬綿の 下から出ても人に踏まるる」
「貧乏をすれど我が家に風情あり 質の流れに借金の山」
(落語「掛け取り萬歳」より)

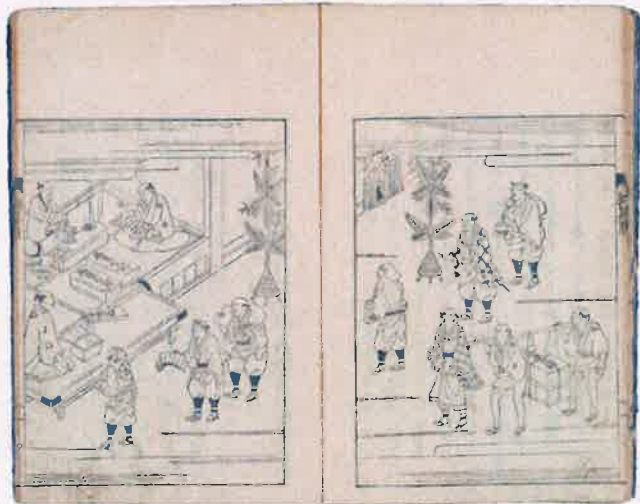
井原西鶴の『世間胸算用』は大晦日の日に焦点をあて、町人たちの悲喜劇を描いた作品です。巻1「問屋の寛閨女」では、借金だらけの大坂商人が振手形を使って借金取りの猛攻を切り抜ける様子が描かれています。

「霜月の末より銀25貫目、念此なる両替屋へ預け置き、大払(大晦日の払い)の時、米屋も呉服屋も味噌屋紙屋も肴屋も、観音講の出し前も、揚屋の銀も、乞にくるほどの者に、その両替屋で請けとれと、振手形一枚づつ渡して、萬仕廻うたとて年籠りの住吉参り、胸には波のたたぬ間もなし。(中略)さればその振手形は25貫目に、80貫目あまりの手形持ちかくる程に、両替には算用差引して後に渡そう振手形大分ありと、さまざま詮議するうちに、また掛乞もその手形を先へ渡し、また先からさきへ渡し、後にはどさくさと入りみだれ、埒の明かぬ振手形を、銀の替わりに握りて年を取りける。一夜明けければ豊かなる春とぞなりける。」

(『世間胸算用』巻1)

借金の返済に詰まった商人が、11月末ごろにあらかじめ両替商へ銀25貫目^{*2}を預けておき、年末に押しかけた借金取りたちへ預金額の3倍以上の額面の振手形を振り出して返済に充て、本人は年越しに住吉参りへ行ってしまう。振手形は借金取りから借金取りへ次々と渡り、最終的には不渡りとなった振手形を手にした借金取りは呆然と年を越します。一方、大晦日を過ぎれば決済は次の節季まで持ち越しか帳消しとなり、逃げ切った商人は心置きなく春を迎えています。

両替商への預金はすべて当座預金であり、振手形は現在の小切手に相当し、預金者から両替商に振り出されました。手形の受取人が振り当て先の両替商に手形を持参すると、預金額内であれば相当の金額が支払われ、預金額を超えると不渡りとなります。事例では、不渡りを見越して預金額を超えた振手形を乱発し、裏書譲渡が複数回行われるうちに支払いをうやむやにするしたたかな大坂商人の姿が描かれています。



井原西鶴『世間胸算用』巻1「問屋の寛間女」挿絵(京都大学付属図書館所蔵)

江戸時代の手形取引

江戸時代、三都の発展と共に、隔地間の送金や商品代金の支払いに手形が用いられるようになりました。特に両替商の活動が盛んであった大坂では、手形取引も活発に行われました。手形取引は寛永年間、大坂の両替商天王寺屋五兵衛が始まると言われ、その後小橋屋浄徳、鍵屋六兵衛ら両替商によって手形が本格的に流通していきます。

江戸時代に両替商を通して流通した手形は、主に為替手形・振手形・振差紙・預り手形の4種類でした。振手形は前述の通り、振差紙は両替商相互間のみ流通、預り手形は両替商が預金者に交付した預金証書です。為替手形には送金為替と逆為替の2種類があり、主に江戸-上方間の送金や商品代金の支払いに用いられました。

為替手形(置手形)を読む

以下の資料は、幕末期、大坂-江戸間の送金に使われた為替手形(送金手形)です。大坂で呉服商と両替商を営んでいた小橋屋本店から三井越後屋の大坂両替店に発行されました。手形は本手形と置手形の2通が発行され、置手形は控えとして用いられました。



『御為替置手形之事』(国文学研究資料館所蔵)

【書き下し文】 御為替置手形之事

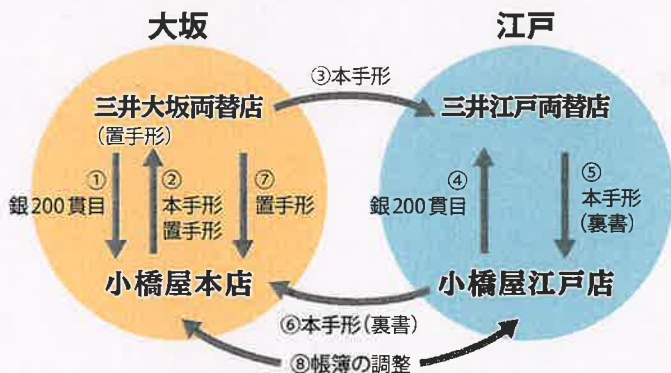
一 銀貳百貫目、來たる七月廿八日限りの御為替請け取り、則ち、別紙為替本手形相渡し申し候、方一手形紛失いたし候か、江戸において相渡し申さず候はば、京都において急度相渡し申すべく候、もし連印の内差し支えこれあり候はば、相残り者方より相渡し申すべく候、そのためよつて件のごとし

安政四年己閏五月

小橋屋 利 助(印抹消)
手代 仁兵衛(印抹消)
手代 彦 七(印抹消)
小橋屋 茂兵衛(印抹消)
三井元之助殿
三井三郎助殿
三井次郎右衛門殿

資料から読み取れる為替取組は、図に示した通りです。三井大坂両替店が銀200貫目^{※3}を小橋屋本店に預け、引き換えに小橋屋本店は本手形と置手形を三井大坂両替店宛に発行します。手形を受け取った三井大坂両替店は控えとして置手形を手元に置き、三井江戸両替店に本手形を送ります。三井江戸両替店は本手形をもって小橋屋江戸店へ行き、銀200貫目を受け取ります。引き換えに受け取った旨を本手形に裏書し、小橋屋江戸店へ渡します。小橋屋江戸店から小橋屋本店へ裏書済の本手形を送り、受け取った小橋屋本店は預け主である三井大坂両替店に本手形の裏書を見せ、置手形を回収します。

今回の資料は置手形であり、為替取組の間、三井大坂両替店が手元に置き、取組終了後に小橋屋本店へ返却されました。万一、本手形を紛失するか、江戸で顔面通りの銀が支払われなかった場合には、小橋屋京都店が全額を補償すること、連印者が責任を負うことが誓約されています。



両替商間の信用ネットワーク

小橋屋の本店と江戸店は、帳簿の調整により銀の出入を管理し、三井は手形の移動のみで、大坂-江戸間の大量の銀の輸送を実現しました。

以上のような為替取組は両替商間の信用ネットワークによって成立し、江戸中後期には日常的に広範囲に行われていました。両替商を中心として発達した江戸期の信用経済は、近代以降の日本の信用取引の発展につながり、信用調査が普及していく礎となったといえるでしょう。

※1 等国データバンク公式ホームページ「信用調査とは」<https://www.tdb.co.jp/sinyou/index.html> (2023年8月15日)

※2 銀25貫目= 銀2万5千両、銀60匁=金1両、1両を現在の8万円として換算すると約3千円相当。

※3 2両様、銀200貫目= 銀20万両、約2億7千万円相当。

【おまけ】

・林玲子編『日本の近世 第5巻 職人の活動』中央公論社、1992年

・作道洋太郎『近世における為替手形の発達 - 特に関東-大坂間の手形流通を中心として -』『大阪大学経済学』第8巻第1号、1958年

TEIKOKU DATABANK HISTORICAL MUSEUM

MUSE | 2023.9 Vol.43

帝国データバンク史料館

〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町14-3 TEL.03-5919-9600(直通)

ご来館の際は、1F受付にお越しください。

ご利用案内

[入館料] 無料

[開館時間] 10:00~17:00

[休館日] 上・日・月曜日および祝日、年末年始

(その他展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。)

交通のご案内

[JRご利用] 中央線・総武線 市ヶ谷駅 徒歩8分

中央線 四ツ谷駅 四ツ谷口から徒歩9分

[地下鉄ご利用] 南北線・有楽町線 市ヶ谷駅 7番出口から徒歩6分

都営新宿線 曙橋駅 A4番出口から徒歩9分

丸ノ内線・南北線 四ツ谷駅 2番出口から徒歩9分

ご来館の際には館内のご案内、ご質問など、お気軽にお申し付けください。
なお、当館ホームページで展示内容や最新ニュースなどをご紹介します。

www.tdb-muse.jp

